

## 斎藤実宛後藤新平書翰

## 近代日本植民地文書研究会

## 解題

十河和貴

本史料紹介は、国立国会図書館憲政資料室所蔵「斎藤実関係文書」（書翰の部）所収の斎藤実宛後藤新平書翰全二七通の翻刻・紹介をするものである。後藤新平・斎藤実は、ともに近代日本が領有した植民地において統治経験を保持しており、台湾・満洲・朝鮮の歴史上において彼らの及ぼした影響の大きさは、改めて論じるまでもあるまい。しかしこの書翰群は、これまでの研究において十分に使用されてきたとは言いがたい現状である。そこで、それぞれ異なる植民地において統治に当たった両者の間で、いかなる情報や意見の共有がなされていたのかを明らかにすることとは、近代日本植民地史研究にとって有益であると考え、ここに史料翻刻を行うこととした。翻刻を担当した「近代日本植民地文書研究会」は、立命館大学の山崎有恒教授により結成され、同大学の教員・大学院生を中心としたメンバーにより構成されている。今回の翻刻担当者は以下の通りである（敬称略、五〇音順、幹事役には〇を付し、括弧内には各メンバーの担当した書翰枝番号を記した）。

伊故海貴則（六・二四）、海野大地（三・四・二七）、織田康孝（一五・一七・二五）、久保健至（一二・一四・一九）、〇十河和貴

斎藤実宛後藤新平書翰

（二三・一六・一八・二三）、田中将太（二六）、西野拓哉（五・一一）、藤野真拳（一・二）、丸山彩（二二）、山口一樹（九・一〇・二〇・二二）、吉田武弘（七・八）

興味深いことに、後藤新平（一八五七・一九二九）と斎藤実（一八五八・一九三六）はともに現在の岩手県奥州市水沢区出身の同郷人であり、かつ二度も同一の内閣（第二次・第三次桂内閣）に通相・海相としてそれぞれ入閣している。本稿で紹介した書翰（一六）（以後、〰）で表記した場合、はすべて翻刻書翰の史料番号とする）において、後藤が斎藤に対して「幼にして郷を同くして長して専攻の門を異にするも二回内閣二席を列し其縁偶然ならざるものあらん」と述べている通り、両者は全く異なる経路からそれぞれ出世したにもかかわらず、その親交は相当深かったのである。それではここで、両者の略歴を紹介する。山崎為徳を加え「水沢の三秀才」とされた二人は、ともに明治二年八月設置の胆沢県に大参事として赴任してきた安場保和の知己を得ることで、出世の糸口をつかむこととなる（後藤にいたっては、のちに安場が岳父となる）。このように共通点の目立つ両者だが、片や斎藤が同郷人に対し面倒見がよかったのに対し、後藤はそれを顧みなかったとされるなど、人間性が異なる部分も少なくなかったようである。こうした点も反映してか、両者は全く異なる経路

で出世した。

まず後藤は、明治一五年に内務省衛生局に出仕、官僚になって以降、ドイツ留学を経て明治二五年に内務省衛生局長に就任する。順当な出世ルートをとどるかと思われたが、明治二六年相馬事件に連座したことで収監され、一時失脚した。しかし明治二八年に石黒忠憲の推薦もあり、児玉源太郎から臨時陸軍検疫部事務官長に任命され官界に復帰。明治三一年には台湾総督府民政長官となり、著名な「三大事業」や「生物学の原則」による統治法を敷くなど、領有初期の台湾施政に重要な役割を果たした。明治三九年には南滿洲鉄道初代総裁に就任し、滿洲でも台湾での統治経験を踏まえ、経営に従事した。その後は国内において、第二次桂内閣通相・初代鉄道院総裁、第三次桂内閣通相、寺内内閣内相・外相、東京市長、第二次山本内閣内相を歴任し、晩年は貴族院勅選議員となった。

一方の齋藤は、明治一二年に海軍兵学校を卒業し、明治二一年には駐米公使館付駐在武官を務めた。その後海軍参謀本部員・戦艦「富士」回航委員などを歴任し、明治三二年に山本権兵衛海相の下で海軍次官に就任した。以後、第一次西園寺内閣、第一次山本内閣にいたるまで八年間海軍大臣を務めたが、シーメンス事件により辞任し、予備役に編入されたことで一時失脚する。しかし原敬内閣時に朝鮮総督に抜擢され、いわゆる「文化政治」を推進、田中義一内閣期に一時枢密顧問官に転任するも、昭和四年には再度朝鮮総督に就任し、昭和六年に辞職するまで長きにわたり朝鮮統治を行った。そして昭和七年に第三〇代内閣総理大臣を拝命、辞職後は内大臣に就任するも、二・二六事件で暗殺された。

次に、今回紹介する書翰の概要を、いくつかの焦点に限定して紹介していきたい。まず一点目に注目されるのが、両者の関係性である。(一)では、明治二二年段階で齋藤が、後藤に議員就任の希望があれば周旋す

る意向であったことがうかがえる。しかし当該期の国会議員は「格別之名譽も無之且歳費は莫大二却て窮迫」するような状態であり、政治的にも出世の道が確約されているわけではなかった<sup>①</sup>。こうした事情から、官僚として生きていく道を選んだ後藤が、後述するように政党内閣期において影響力を後退させていくことは、近代日本の世代性を考える上で興味深い。

その上で、両者の関係性として最も注目されるのが、人的ネットワークを通じた人事・施政相談である。今回紹介する書翰全一七通のうち、(三)〈四〉(八)〈九〉(一一)〈一二〉(一五)〈一八〉(二〇)〈二二〉(二四)〈二六〉の一三通は、後藤が懇意の人物を齋藤に紹介し、あるいは斡旋を依頼したものである。(一一)は、悪評の高かった湯地丈雄に対し、その誤解を解くべく、彼が海軍に有用な人材であることを海軍総務長官であった齋藤に訴え、本人に面会することを希望している。さらに(一二)では、伊東巳代治の長男である伊東太郎の、海軍経理学校の教官就任の希望を叶えるべく斡旋しようとする齋藤に取り次いだものである。これらの人物を、単なる縁故で紹介しただけなのか、それとも何か後藤の中で海軍に対する考えがあり、それに合致した人物であるがゆえに推挙したのか、まだ考察の余地は残されているが、いずれにせよ海軍人事に対して後藤が私的に意見を伝えていることは注目すべきである。

このように、表面上にはあらわれないが、両者の私的関係が海軍省(あるいは朝鮮)と台湾総督府の施政の上で重要な役割を果たしていたことを確認しておきたい。特に(八)は、後藤が投火処分を依頼しているにもかかわらず残存している貴重な史料である。ここでは、後藤が台湾民政長官を務めていた際に、台湾総督府軍務局海軍参謀長として赴任した山本正勝中佐の人格を問題視し、暗に転任を齋藤に促していたことが記されている。後藤が私的関係から、齋藤を通じて海軍人事に介入しようと

している点で興味深い。同様に〈一八〉では、朝鮮総督府のプロパガンダ政策に対して後藤が「斯道の経験家ニ有之杜撰の事ニ無之」とジャパントイムスの芝染太郎を擁護し、齋藤に推薦している。このように、植民地統治上の重要な政策・人事に絡んだ問題の裏では、両者の私的関係をベースとした綿密なやりとりがなされていたのである。ただ、書翰内で後藤が数多く齋藤に送付したらしき「別紙」は、「齋藤実関係文書」内には一通も残存しておらず、現時点ではより詳細な情報が読み取れない状況にある。

次に、植民地統治に関わる内容の書翰を検討していく。やはり後藤の発翰ゆえ、台湾に関するものがほとんどであり、具体的には〈五〉〈七〉〈八〉〈一四〉〈二五〉〈二二〉〈三三〉〈二五〉などがそれにあたる。特に〈二五〉〈二五〉両書翰は、いずれも台湾産業の輸出入に関するものであり、台湾総督府・海軍による南進政策を考える上で非常に興味深い。〈二五〉は、フィリピン・ミンドロ島で製糖業の実業活動に従事していた松岡富雄の事業を紹介し、後藤が南洋方面における実業事業の有用性を齋藤に説いた内容である。台湾総督府や台湾銀行は、当該期においてすでに南進政策を進めていたが、国家レベルの政策としては位置づけられていなかった。後藤は「純然たる個人事業なるへからず海軍並外務当局の意見ニよるやに存候」と述べ、齋藤を通じて海軍の協力を求めた上で、山本首相の協力を得るための尽力を依頼している。のちに台湾の南進論を実現しようとした最も大規模な半官半民間である台湾拓殖株式会社<sup>②</sup>が設立されることを考慮すれば、これは、個人事業としてのフィリピン製糖業に限界を感じた松岡が、官をも巻き込んだ、いわゆる半官半民事業へと変貌させようとする動きとして位置づけることができる。と考えられよう。さらに、後藤がこの事業援助に積極的な姿勢をみせたことから、彼には将来的に台湾の南進政策を国家レベルまで発展させようという思

惑があったと推測され、後藤の構想および当該期の台湾総督府・海軍による南進政策の動きを考える上で重要である。なお、松岡はこの後台湾拓殖株式会社の設立者にも名を連ねている。

〈二五〉は、台湾の特産品である茶の試製品を、齋藤に送るという内容である。情報量の少ない書翰ながらも、茶の輸出を奨励しようとしていた後藤の姿勢が浮かび上がり、大正期には茶の生産量・輸出高が大幅に増加するという結果からも、後藤の影響力を再評価し得る可能性を秘めている<sup>③</sup>。

さらに同様の件で注目されるのが〈七〉である。台湾銀行厦門支店の融資問題に対して、総督府民政長官であった後藤が添田寿一頭取に注意を与えている内容であるが、これも海軍・総督府の対「南支」政策に関わる重要な問題であったと推測され、こうした事件処理について後藤と齋藤が私的に情報共有を行っていたことがわかる。また〈二四〉は、一見ただの人物紹介に思われるが、後藤勝造は神戸商業界の重鎮であり、後藤回漕店(丸マ)を創業した人物で、後藤の知遇により台湾への回漕や樟脳業などで利益をあげていた。台湾の貿易・海運業にとって重要な人物であり、鈴木商店飛躍の契機を作った人物でもあった。彼は将来的な台湾の南進政策を考える上で欠かせない存在であり、齋藤との関係形成を後藤が重視した様子<sup>④</sup>がうかがえる史料である。このように、後藤と齋藤の私的関係は、台湾施政に関する情報共有を行い、総督府と海軍省の調整を行っていたのである。

以上の概観からうかがえるように、後藤・齋藤両者は明治中期より出世はじめ、明治後期〜大正期にかけて政治的立場を固めるといって酷似している。台湾総督府民政長官・海軍次官とそれぞれ重役に就任し、活躍した時期もほぼ一致し、前述したように同時期に二度入閣するなど、その経歴と出世過程は軌を一にしている。しかし、齋藤が晩年に首相に

まで登りつめたのに対し、度々首相候補に名を連ねた後藤は、第二次山本権兵衛内閣の内相を辞任して以降は、政界の第一線で活躍することはなかった。それゆえか本書翰群の中で昭和期のものは見られず、明治・大正期のものが全てである。このことは、政党内閣期における両者の役割において、歴然とした差が生じたことを示しているといえよう。そこで最後に、両者を対比しつつ、筆者の関心事でもある政党内閣期と植民地を改めて考えることで、本問題を締めくくるとしたい。

政党内閣期は、内閣による権力統合を目指す政党が、植民地行政・人事にまで手を伸ばすようになったことにより、各植民地統治形態に大きな影響を及ぼした。その中で斎藤は、政党内閣期の大半において朝鮮総督を務めたのみならず、植民地統治機構にまで内閣の影響力を伸ばそうとした政党に対して一貫して抵抗し続けた。最終的に戦前日本統治期朝鮮において遂に文官総督が生まれなかったという事実に対して、斎藤の結果とした役割はきわめて大きかったといえる。

加藤聖文氏の研究によれば、拓務省は「議会等に対する植民地統治の責任所在を明確化することと満蒙行政機関統一問題の解決を目指す機関」として加藤高明・若槻内閣より設置が検討され、田中内閣末期に設置された。しかし田中内閣は外務省および斎藤秘密顧問官の反発を受け、拓務省は大幅な権限縮小を余儀なくされ、さらには満蒙問題に対する田中内閣の失政により、設立当初には既に骨抜き状態であったという。田中内閣により枢密院に押込められた後も、斎藤は政党内閣による権力一元化の動きに反発し続けた。概して政党内閣期において、斎藤の存在感には相当高まっていたと評価できよう。それは、度々内大臣・宮内大臣候補に挙げられたことや、政党内閣期終焉後において、挙国一致内閣の首班に抜擢されたことに何よりも示されている。

ただし、内閣の交代に連動した朝鮮政務総監の更迭により、斎藤の朝

鮮統治における影響力は流動的であったという李炯植氏の研究もあり、<sup>⑤</sup> 二二二は、その文脈に位置づけられる。政党内閣期の嚆矢とされる第一次加藤高明内閣において、朝鮮政務総監であった有吉忠一の更迭が予想された際、後藤は斎藤との人脈を通して、遠藤源六が推薦した菅原通敬を後任の政務総監に推している。斎藤の意中も菅原であった可能性があり、<sup>⑥</sup> 後藤の意向は反映されかけたのであるが、最終的には憲政会系の下岡忠治が就任した。政務総監人事を通して政党内閣の影響力を行使するという政党内閣期における朝鮮統治体制の特徴を形成する嚆矢となった一件に際して、後藤・斎藤は対案を持ちつつも結局は人事抗争に敗れたのである。その意味で、本書翰は政党内閣期における植民地統治体制という大きなテーマにまで発展し得る書翰であろう。

さて、一方後藤は、第二次山本内閣で内相を務めるも、著名な帝都復興計画で挫折し、清浦内閣以降は重要な役職に就くことはなかった。内相時代に多くの批判にさらされたことも一要因ではあるが、より大きな要因としては、確固とした政治基盤を持ち得なかったことに求められるのではないかと考えられる。大正後期より、薩派を中心とした挙国一致内閣を声望する勢力からは、後藤を内閣の首班に求める意見が宮中にもたらされていた。<sup>⑦</sup> しかし政党内閣期において、挙国一致内閣の実現性は低かったであろう。また、後藤自身も、田中首相に政党内閣の弊害を是正する必要性を訴えた意見書を送っていたが、<sup>⑧</sup> 実質的な政治的影響力はかなり低下していたといつてよい。直接的提言をする以外に抵抗する手段を持たない後藤は、政党内閣期に政治基盤を失った官僚を象徴しているといえよう。そこで注目すべきは、後藤が影響力を行使していた台湾である。

明治期の台湾施政を主導した後藤の台湾総督府における影響力は大きく、いわゆる「後藤系」といわれる「生え抜き官僚」は、文官総督制と

なる田健治郎・内田嘉吉総督時代にも一定数が残存していた。例えば、〈五〉において登場する賀来佐賀太郎は、田・内田総督期の総務長官（民政長官の改称）を務めており、〈一五〉で紹介した松岡富雄は田・内田総督期の台湾総督府評議会会員であった。しかし第一次加藤内閣期に内田総督が更迭され、憲政会系の伊沢多喜男が総督に就任すると、後藤系・田系は大きな打撃を受けた。賀来は同時に更迭され、台湾総督府評議会は一時開催されなくなったのである。このように、台湾は人事面で多大な影響を蒙り、政党内閣期には伊沢の影響力が強大になったのである。相対的に後藤の影響力が失墜したことも、政党内閣期における後藤の低迷要因の一つに挙げられよう。

以上を通じて浮かび上がってきたのは、斎藤が朝鮮総督という権威を軸にして政党内閣に対する猛烈な抵抗を続けたのに対し、後藤は政党内閣の波に抗えず、政治家としての権威を著しく失墜させたという対照的な両者の構図である。政党内閣期以前までは「専攻」は違えどもほぼ同様のペースで出世し、権力を有していた両者が、政党内閣期において対照的な結末を迎えたことは、きわめて重大な問題ではないかと思われる。あくまで筆者の仮説ではあるが、こうした構図は両者の範囲内に留まらず、ある程度当時の政治構造の縮図のような形になっているのではないかと推測される。すなわち、二大政党時代において、明治〜大正後期にかけて活躍した人物は、政党に協力的姿勢を取る者を除いては、本来政党内閣の影響力が及ばなかった「牙城」において抵抗するか、勢力基盤を失い後退していくかの二つの道筋に限定されてしまったのではないか。こうした国内政治史・植民地政治史両方面の連関性を考える上でも、今回紹介した史料群は有用である。

以上、今回翻刻した書翰の概要と注目すべき点を、両者の関係性を中心に述べてきた。本史料紹介が、近代日本の植民地史・国内政治史をつ

なく架橋として考える重要性を少しでも示せたなら幸甚である。本分野の研究成果のさらなる進展が期待される。

最後に、「近代日本植民地文書研究会」は、立命館大学による「アジア・日本研究推進プログラム」和解分野、「トランスナショナルデジタルアーカイブの構築による近代日本植民地史の研究」研究プロジェクトの一環として立ち上げられ、植民地に関わる未翻刻書翰のくずし字判読に取り組んできた。本史料紹介は、その成果の一部である。また、本研究会は、二〇一七年度に立命館大学から、大学院学生研究会活動支援制度として助成金を受けた。

また、本史料紹介の作成過程にあたり、直接の翻刻者以外にも、以下の方々の協力を賜わった。記して謝したい（木多悠介、小林愛恵、松本昂也、順不同、敬称略、五〇音順）。

#### 註

- ① 村瀬信一『帝国議会（戦前民主主義）の五七年』（講談社選書メチエ、二〇一五年）一〇〇〜一一〇頁。
- ② 松岡富雄「比律賓糖業会社買却申込ノ件」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref:B11091031000\_砂糖関係雑件 第三卷（B3-5-2-67\_003、外務省外交史料館）。この点についてはさらなる考察が必要であるため、別稿を期したい。
- ③ 台湾総督府・海軍の貿易振興にともなう南進政策については、いまだ検討の余地があるため、これについては別稿を期したい。
- ④ 加藤聖文「政党内閣期における植民地支配体制の模索―拓務省設置問題の考察―」（『東アジア近代史』創刊号、一九九八年）五二頁。
- ⑤ 李炯植「政党内閣期（一九二四―一九三二）の朝鮮総督府官僚の統治構想」（『東京大学日本史学研究室紀要』第一号、二〇〇七年）三七四〜三七五頁。
- ⑥ 『東京朝日新聞』大正一三年九月一日付朝刊。

⑦ 「牧野伸顕関係文書」書翰の部二六七・三、大正一四年七月二一日付牧野伸顕宛町田経字書翰。

⑧ 「後藤新平関係文書」二二・四三、「田中首相に与ふる書」昭和二年六月一五日付。

⑨ この経緯については、拙稿「轉換期」的總督權限問題…以政黨内閣期前夜の台灣總督・田健治郎的動向為中心」（許仟慈訳、薛化元・川島真・洪郁如主編『台灣與東亞近代史青年學者研究論集（第二輯）』台北：稻鄉出版社、二〇一七年、三〇二七頁）で論じている。

⑩ 加藤聖文「植民地統治における官僚人事―伊沢多喜男と植民地―」（大西比呂志編『伊沢多喜男と近代日本』芙蓉書房出版、二〇〇三年）一一一～一三九頁。

## 凡例

一、書翰の掲載順は、「斎藤実関係文書」の目録の順番に従っている。  
（一）で記した数字は、目録の枝番号である。

一、年代推定については、消印や内容から確証を得られたものは括弧なしで表記し、確証が得られないものは「―」を付した。また、年代推定の根拠や史料の位置づけなどにつき、書翰ごとに簡単な解説を付した。

一、句読点は適宜これを補った。

一、仮名遣い、濁点、半濁点は原文のままとした。ただし変体仮名や合成字は、助詞も含めてすべて平仮名に改めた。

一、漢字は原則として常用漢字を使用した。常用漢字になくとも慣例的に用いられている表現や人名中の旧漢字はこれを採用した。

一、誤字など史料の誤りと思われる箇所は、「ママ」を付し、文意が読み取りにくい字には「カ」を付した。

一、判読困難な箇所は、文字数相当分の■印で示した。  
一、改行は、本文の形をそのまま再現した。

## 翻刻

（一）明治22年4月26日

〈封筒表〉 府下芝区田町五丁目／十番地海軍大尉／斎藤実殿／親展

〈封筒裏〉 東京麻布材木町／後藤新平

過日は進上失敬昨日御従弟様御枉賀其節御伝言ニ小生国會議員ニ望候ハ、御周旋可被下思召之旨御示諭之処厚恩不軽奉謝候。

先般も国會議員之儀ニ付郷里より申越候ニ付小生の意見申遣候。其際ハ他ニ無之候小生の議員ニ相成は格別之名譽ニも無之且歳費は莫大ニ却て窮迫之種ニ御座候。乍去自然郷人の衆望ニ候ハ、敢て利益の点損失之点より辞退候事同胞相愛之義務ニはつれ候ゆへ相受け可申候。尤も郷人ニして是迄老練の人又は壯年ニて熱望候ものも有之候ハ、可成其人を撰出可致候。小生は乍不及其人を賛助候事ニは十分微意を尽し可申旨相答候乍明年ニ相成郷人の望万一小生ニ属候ハ、仮令内務大臣ニ於て小生の国會議員たるを許さる場合ニ相成候とも寧ろ内務大臣ニ従はんよりも郷人の望ニ従はんニ存候位の求ニ郷人は有之候ゆへ其際不都合無之様地租上の資格で十分致し可申と存居候。

本文之次第二付此方より手を尽し撰拳を争ひ候事ハ致し申間敷又官吏之多兼ね候よりは純然民間より出て候事小生ニも希望之至ニ候故時流にならひ周旋候事ハ如何と存候。御高見の程も承り奉り度候。万一放任候て自然之望多数ニ候ハ、就任可致迎も貧生進て可望事ニは無之と存居候。東京医会ニて候補者の説有之候得共小生は撰拳を争ひ候事当分望無之と断然申張候。右懇意の所を御頼まで。勿々敬具

四月廿六日 後藤新平  
齋藤兄 侍曹

◇ 本書翰の作成年代は明治二二年、後藤新平の内務省衛生局奉職期のものと推定される。後藤が「国会議員」となることを謝絶した理由として、「此方より手を尽し撰挙を争ひ候事ハ致し申間敷」「時流にならひ周旋候事ハ如何と存候」「万一放任候て自然之望多数ニ候ハ、就任可致」といった点を挙げているところからは、第一回衆議院議員選挙を控えたこの時期の、党利政略的な選挙活動から距離を取ろうとする後藤の姿をみてとることができる。

(2) 明治23年5月31日

〔封筒表〕 東京／齋藤実様／御親展 〔封筒裏〕 伯林／後藤新平

先般可相勸候出立前何より之御品御恵投被下難有奉謝候。妻様へも御礼よろしく奉願上候。愚弟婦在京定て御世話ニ可相成よろしく御示し奉願上候。着御報まで。勿々敬具

五月三十一日 後藤新平

齋藤実様 侍史

御通信等は公使館宛 (c/o) 注意書にて相届き可申候。以上

◇ 後藤がベルリン留学中に齋藤に宛てた礼状である。

(3) 明治28年1月16日

〔封筒表〕 広島市高屋町／溝口方／齋藤実殿／親展

〔封筒裏〕 麻布三軒屋町／後藤新平

拝読愈御清康奉賀候。御地出発前一度緩話相願度存居候へとも混雑中其

意を得ず欠敬却て御多忙中御紙上を煩し恐縮千万面会旧主君の事至極好都合ニ候へとも英学は名のミにて役立不申到底外人ニ対し単語も六ヶ敷哉と奉存候。

漸く変則拾ひ読み位なるべし人物は温厚筆硯相応ニ出来申候名古屋にても苦しからず候へとも可相成は先東京にて十分なりし候上ニ地方ニ出しか候様致度と奉存候。

此処御苦み御尽力之程奉願上候。小生も各地浮浪漸く昨十五日帰京致候。

それゆへ御答も遷延多罪御寛恕奉願上候。草々拝復

一月十六日 新平

齋藤大兄 侍史

野田監督長官へも御序よろしく。

◇ 宛先住所が広島市であり、齋藤が日清戦争で侍従武官として広島大本営に赴任していた明治二八年のものと推定する。旧主君とは、水沢伊達家、留守邦寧の子基治あるいは景福かと思われる。父の邦寧は胆沢県小参事のときに大参事である安場保和へ県庁給仕として齋藤・後藤らを推挙したことで出世のきっかけを設けたため、そのことも関係していると推測される。

(4) 明治31年11月16日

〔封筒表〕 齋藤海軍次官殿／添書御親展 〔封筒裏〕 後藤新平

拝啓

御栄進奉賀候。早速御祝詞可申上之処新内閣成立に付上京中之身分取込居欠敬致居候。陳は国民新聞記者草野門平君従来懇親ニ往復致居本人軍事上御高話拝承心得置度との事ニ候故添書差出候御都合御引見被下度書外万縷拝芝ニ譲り候。草々不尽

十一月十六日 新平  
齋藤大兄 侍史

◇ 宛名に海軍次官とあり、「新内閣成立に付上京中之為」とあるところから、第二次山県内閣時、明治三一年と推定される。草野門平は国民新聞の記者である。本書間の数ヶ月前、六月三〇日に後藤は徳富蘇峰へ、「台湾で内地の情勢が分からず不便であり、「一人官員を東京に在勤為致候事」を求め人選を要請している。そこで選ばれたのが草野であり、七月九日には「その後草野君より追々御報道を煩わし中央政況も相分し候」と蘇峰へ感謝を述べている。なお草野は、「機密文書に至りては、事の公私に関するを問はず、殆んど一切君が手に委任し措置せられた」と、蘇峰の秘書的役割を担うまでになった人物である。

(5) 明治〔38〕年10月31日

〈封筒表〉 齋藤海軍次官閣下／必親展

〈封筒裏〉 後藤新平／賀来事務官持参

過般満韓より帰京之際僅二兩三日滯京直ニ帰台致候故拝話之機を得ず遺憾此事ニ御坐候。

然るに此度本府通信局事務官賀来佐賀太郎入京ニ付前日拿捕船中保管管被相伺間敷哉海軍参謀長を経て内意申出澎湖島司令官より老兄ニも御内話致し御伺申上居候筈と存候処右ニ付賀来事務官入京の序を以て事情詳述為致度本文之次第ゆへ御多忙中恐縮之至ニ候へとも御引見被下度添書仕候。草々不尽

十月三十一日 新平

齋藤賢台 侍曹

◇ 台湾総督府民政長官・後藤が、海軍次官・齋藤に宛てたもの。台湾総督府民政部通信局事務員の賀来佐賀太郎の入京を待ち、拿捕船に關しての事情詳述を行う旨を伝えている。齋藤の海軍次官在任期間および、賀来が台湾総督府通信局事務員を務めていることから、明治三七年もしくは三八年と推定される。

(6) 明治39年1月11日

〈封筒欠〉

過刻官邸まで参趨之処御来客御会合中の由ゆへさし扣候。実は旧仙台館有志一同にて閣下今回之榮進を賀する為め帝国ホテルニ祝宴一夕相開度日時は閣下の御都合ニまかせ本日より一週間之渡にて御指図ニ随ひ可申筈富田翁等も発起の一人にて別ニ御迷惑なる連中ニは無之御多忙中御差支も虞り候へとも枉けて御承諾被成下度右御案内使者として参上致候次第書中にて申上候。電話にて貴答を得候へは幸甚之至ニ奉存候。草々敬具

一月十一日 後藤新平

齋藤海相閣下 侍曹

◇ 本書翰は、明治三九年来に齋藤が海軍大臣に就任した際の祝賀会の開催案内に関するものである。

(7) 明治34年1月23日

〈封筒欠〉

拝読福州総督へ關係之台湾銀行事件昨年来種々考案之末ニ有之万遺策なきを期し居候へとも佐野君内報之事情実を得候様被察候。

台湾銀行ニも人を得申より生し候事なり。先日添田頭取へ小生より注

意方申入置候故佛国の方ニ相運ひ居候模様なれば此際断然手を引候方可然と申論置候。旁大二其情を詳悉致し候故注意可致候。書外万拜話ニゆつり候。早々御内報之御礼まで。敬復

一月廿三日 新平

齋藤賢兄 侍曹

過日佐野大尉報告書御返事申上候。御査収被下度候也。

◇ 本書翰は、明治三四年頃懸案となっていた中国福建省に対する台湾銀行厦門支店からの融資問題に関し、後藤が「此際断然手を引候方可然」との意見を同銀行頭取添田寿一へ伝えたことを報じたものである。明治三三年五月、はじめての海外支店として厦門に支店を設置した台湾銀行は、閩浙総督・許応騫との間に馬尾造船所を担保とした融資交渉を進めていた<sup>③</sup>。これは日本が、厦門事件の失敗などを受けて経済進出へと方針を転じていく当該期の状況も背景としたものであったが、最終的にフランス系資本による融資が現実的となったため、後藤が計画の中止を求めるに至ったものと思われる<sup>④</sup>。

(8) 明治38年5月8日

〔封筒表〕 東京海軍省／齋藤海軍次官殿／私用／必親展

〔封筒裏〕 東京／後藤新平

拝啓

其後益御多祥奉敬賀候。過般荒井之件御紙上ニ付早速本人へ内示致置電信を以て御回報致し候次第御承知被下事と拝察致候。陳は海軍参謀長として山本中佐赴任之処本人は小生十年来之知人ニ有之其性質も略承知致居候故有之多少個人的注意致置候へとも赴任後日も浅く候へとも陸軍民政部並に民間等の間ニも批評有之磯部副官も大二苦辛之様被窺更に台湾

齋藤実宛後藤新平書翰

には海軍にて格別重を置かれざるにやとの噂も耳ニ致し候。帝国海軍の為余り軽率なる人はこまりものと存候。是は全く私上の通信にて老兄の御含まで申進候。内報として御一覽後御投火被下度候。時宜ニより戒嚴令もしき候哉ニ承り今後の形勢にて官民各部ニ海軍之交渉複雑と可相成旁人物撰定は必要なる時機と相成候故磯部之苦勞も傍觀ニ堪へず平生の御厚誼上より一言申添候。よろしく御取捨被下度候。草々不尽

五月八日 新平

齋藤賢台 侍曹

◇ 明治三八年三月一五日から台湾総督府軍務局海軍参謀長として赴任した土佐出身の山本正勝中佐は、日清戦争などで活躍した人物だが、ときに問題を起こすこともあり、とくに乃木希典台湾総督の副官時代には、台湾鉄道会社創立委員会の席上で「台湾鉄道は見込なし」などと発言し、委員であった安場保和らを激怒させている<sup>⑤</sup>。後藤と齋藤は、ともに安場に見出されたことを出世の糸口としたこともあり、後藤が山本を問題視したのは、こうした事情とも関係しているように思われる。なお、直接の関係性は不明だが、山本は本書翰の一月後には、異例の速さで転任している。

(9) 明治43年5月11日

〔封筒表〕 齋藤海軍大臣閣下／呈／親展／拝参〔封筒裏〕 後藤新平

御直書拝読。平山病死之件愁傷之至ニ奉存候。右ニ付御氣付之通唯今折角手続為致居最中ニ御坐候。海軍ニ於ける同人功績も御紙上之通ニ御坐候。併て稟申之都合ニ相成候ハ、好都合かと奉存候。後任之件は明日の閣議ニ拜話尽し可申草々拝答まで。不罄

五月十一日 新平

## 海相閣下 侍曹

◇ 文中の「平山」は平山藤次郎商船学校校長である。商船学校の管轄は通信省だが海軍予備員条例による商船学校卒業生を予備役に服務させる制度がある関係上、海軍との関係が密接であり、商船学校長人事は齋藤海相と後藤通相が折衝する必要があるため後任についての相談があったのであろう。また「唯今折角手続為致居最中」という文言は、平山への「特旨叙勲」に関する手続きと推測される。そして平山の死亡日も書翰の日付と符合することから、明治四三年と推定した。

(10) 明治一〇年5月11日

〔封筒表〕海軍省／齋藤海軍大臣閣下／別紙在中／親展

〔封筒裏〕官舎／後藤新平

別紙之通岩手県知事より申来候。御瞥見被下度委細は明日閣議にて御面語にゆつり候。草々

五月十一日 新平

海相閣下 侍史

◇ 岩手県知事からの別紙の依頼に対する齋藤の意見を求める内容である。なお別紙は存在していない。この年代については、文中の「閣議」から齋藤と後藤がともに閣僚であった第二次桂太郎内閣と第三次桂内閣の時と考えられ、書翰の日付から明治四二〜四四年の間と推定される。

(11) 明治一〇年6月11日

〔封筒表〕齋藤海軍総務長官殿／添書湯地君紹介〔封筒裏〕後藤新平

## 拝啓

小生の知友にて熊本県人湯地丈雄君御紹介申上候。本人は愛国狂にて世間ニ流行の義を口ニし利を己ニ収めんとする徒ニあらず近く海軍振作ニ力を尽し居候。其源因は元寇の歴史ニ関し源流も清く末流も濁らざるべしと信し候。御多忙中恐縮之至ニ御坐候へとも御操合御引見被下度右御願迄。草々敬具

六月十六日 新平

齋藤賢台 侍史

◇ 後藤が齋藤に宛てたもの。

熊本県出身の湯地丈雄は、明治一九年に発生した清国北洋艦隊水兵の暴動事件である長崎事件に影響を受け、国防観念を盛んにするべく、明治二一年から湯地の死去する大正二二年まで元寇記念碑の建立とその趣意を国民に訴える巡回講演を行っている。齋藤が海軍総務長官を務めていることから、年代は明治三三年五月から同三六年一二月までの期間であると推定される。

(12) 明治43年10月7日

〔封筒表〕齋藤海相閣下／私事顧用／親展〔封筒裏〕後藤新平

## 拝啓

愈明日より四国巡礼の途に上り候。其前参を以て御内意を得度存居候儀有之候へとも及兼紙上にて伺出候。曾て伊東子爵長男海軍出身■■大学法科ニ入り卒業の上既ニ海軍中主計ニ任せられ近く主計学校ニ入学之事ニ相成居候趣の処右入学後又入学前ニても御許可を得ることなれば帝国大学院ニ入り海軍主計学校ニ必要なる経済科を修め将来我海軍ニ尽し度本人は年齢も長し居候ゆへ他のすゝめも有之大学院にて専修の後主計学

校教官の職に奉公致し度所存の由右は一に海相諾否如何に關し候事故小生平生の御友誼も有之候事思ひいろく内伺依頼越候。子爵直ニ拜話候儀は甚自由ケ間敷恐縮ニ付云々申来候。乍御迷惑出来得る儀ニ候ハ、御賢慮煩し奉り度候。尤も伝聞によれば先例は有之哉ニも承り候とのことニ御坐候。右御伺まで。草々不罄

十月七日 新平

齋藤仁兄大人 侍曹

◇ 年代は、「伊東子爵長男」である伊東太郎が「大学法科に入り卒業の上既に海軍中主計に任せられ」たとの記述より推定。太郎が大学を卒業したのは明治四三年で、ほぼ同時に海軍中主計になっていることより、明治四三年頃と思われる。太郎は「海軍経理学校乙種学生」の身分で海軍経理学校に入学はしているものの、卒業した形跡はなく、何らかの事情により後藤の斡旋通りにはならなかった。

(13) 明治43年10月27日

〈封筒欠〉

拜啓去ル二十三日清国載洵殿下ノ為御催之晚餐会ニ於て御撮影之写真一葉御惠贈被下

難有拜受致候。右御礼申上度如此ニ御坐候。敬具

十月二十七日 後藤新平

齋藤海相閣下

◇ 清国の皇族・載洵<sup>⑩</sup>が日本の海軍視察に訪れた、明治四三年の書翰である。清末中国は当時、立憲政治制度の導入等あらゆる内政改革のモデルを欧米諸国や日本に求めており、海軍制度・技術・養成方法の視

察および導入の動きが試みられていた。一方で日本側は、国際的な孤立化の恐れおよび東アジアにおける既得権益を強固にするため、中国との親交が重要課題であった。それゆえ載洵一行に対して盛大な接待を催していた<sup>⑪</sup>。当時は第二次桂内閣であり、後藤は通相、齋藤は海相として晚餐会に出席していた。

(14) 明治( )年12月26日

〈封筒欠〉

拜啓別冊滿洲ニ於ケル金融機関ニ関スル件御参考迄ニ供貴覽度御送付申上候。敬具

十二月廿六日 男爵後藤新平

齋藤海軍大臣閣下

◇ 帝国議会で滿洲における金融機関について取り上げられたのは明治四一年〜同四三年頃である。同時期に、第二五帝国議会・第二六帝国議会において本件に關し、専門委員会が衆議院に設置されており、閣僚として両者とも関わりを持っていった。そして書翰中の日付から、明治四一年か明治四二年のものと推定される。

文中に登場する金融機関に關する問題とは、当時の滿洲に設置されていた横浜正金銀行に關するものである。同行は当初より為替業務などを担当していたが、資金の貸し付けなどの一般的な銀行業務は行っていない。しかし、次第に商工業者が国内より同地へ進出し増加するも、これらの業者は現地で十分な資金を得ることができず、撤退するという事象が発生。この状況に対応すべく、明治四〇年代には現地に住む邦人より投資業務を担当する金融機関の設置要求が出されるにいたった。よって、書翰中の「別冊」とは満鉄設立など滿洲には浅

からぬ関係を持つていた後藤個人が作成した意見書の類ではないかと思われる。

(15) 大正2年10月29日

〔封筒表〕 齋藤海相閣下／別紙ニ相添／親展〔封筒裏〕 封／後藤新平

拜啓其後御無音御寛恕可賜候。陳は別紙式通記載之比律賓属嶋中の一ミンドロと申一嶋の大部分約式万三千エーカー日本人ニ売却之事申入有之候趣右前年来在台湾実業ニ従事成功も致し居追々殖民的行動を比律賓其他南洋ニ試み度心縣居候人物にて松岡富雄と申ものより相談ニ御坐候。本人は前日同地に航行をも致候儀此ミンドロには参りたるなけれど、米国人既に多額投資致し居候て別紙之事情より売却ニ決し候趣ニ御坐候。是は決して純然たる個人事業なるへからず海軍並外務当局の意見ニよるやニ存候。其旨内示候処当局へ問合具候様依頼被致候。殊ニ山本首相ニ大体意見承り度存候故小生直ニ面罄をと存候へとも時節柄小生訪問は小生も首相も迷惑かと相考差扣へ老兄まで書面にて相伺首相へ御内伺被下度候。此上首相ニ於て国家の長計として御攻究可相成事項と被判候ハ、小生より更ニ首相又は他の当局と本人等ニ直接御協商相願度右用事まで。草々不尽

十月廿九日 新平

齋藤海相閣下 侍曹

◇ 実業家である松岡富雄が米国人よりフィリピンのミンドロ島にある土地売却の話を受け、本件を後藤に相談したものであり、齋藤海相に送られたものである。松岡は、『比律賓経済的視察一斑』<sup>⑬</sup>において、フィリピンでの製糖業の可能性を示唆しており、土地売却の件を契機として、フィリピンにおける製糖業の振興を狙ったものと考えられる。

なお、本書翰が出された時期は、山本内閣期（大正二年二月二〇日）大正三年四月一六日）および齋藤海相期（明治三九〜大正三年四月）であるので、大正二年と推定される。

(16) 大正3年2月5日

〔封筒表〕 齋藤男爵閣下／御親展〔封筒裏〕 封／後藤新平

近日之国事御心痛拝察致候。前日来御訪問致度存居候処時節柄却て御迷惑とも存し差扣今日ニ到り候。形勢は追々險悪にむかひ候へとも小生熟知之範圍にてハ老兄ニ対する同情多く特ニ此一事衷心より喜ふへき儀と奉存候。世間にては今回の紛擾中心を小生と誤想し彼是浮説流言紙上なとも見得候へとも一切弁解をも試み不申其假放任之処是上真事情自然と明白ニ相成可申政府側にも前日の狐疑を一掃すへき曙光相見得候かに被察候。昨日幸俱樂部の総会ニ出席候処海軍臨時費削減問題の意見交換ニ有之御承知之七千万円減説ニ反対するものは実吉外二三にして到底弁論の左右すへき情勢ニ無之と被察候。此場合は老兄の引退一日早ければ早きほど公私両方面ニ利益ありと奉存候。既ニ引責の御決心有之趣ニ伝聞但首相との関係上辞表延引せられ候やの話果して誤なれば老兄の潔白衆人も認め居候処ニ付断然御引退之程小生私交上のミならず国家風教の上にも切望之至ニ不堪候。政争上小生ハ此方面の勝敗を暫らく度外視し将来風教ニ関し悪印象を深くすること帝国海軍の爲にも天下の爲めにも惜しむへき処ニ御坐候。此辺然る万々御承知之上御引責の御決心も相成居候事と奉存候へとも昨日幸俱樂部会合の情勢ニ鑑み卑見申上度如斯ニ御坐候。幼にして郷を同くして長して専攻の門を異にするも二回内閣ニ席を列し其縁偶然ならざるものあらん。此に為外観の地点より我信を開陳するの至情よろしく御取捨所希ニ御坐候。草々不尽

二月五日 新平

実仁兄大人 侍曹

◇ 大正三年、第一次山本権兵衛内閣時に生じた、海軍臨時費削減問題についての書翰である。当時、海軍軍拡を主張していた海相・齋藤と、これを議会通過させようとする山本内閣に対して、貴族院を中心に猛烈な反発があった。貴族院多数派である幸倶楽部の予算通過阻止と齋藤海相・山本首相更迭運動が激化していた時期に、対立の渦中にいた両者の間で交換されたものである。

(17) 大正3年6月11日

〔封筒表〕千葉県一ノ宮御別荘／男爵齋藤実閣下／侍曹

消印〔3・6・12〕

〔封筒裏〕東京麻布区／宮村町／後藤新平／一千円五カ年賦と返事済

謹啓 益御清祥奉敬賀候。扱財団法人岩手県教育会に対する育英資金寄附方今回堤会長より勧誘相成候二付きてハ閣下ニ御同様之振合を以て要求ニ相応じ度候ニ付甚だ立入りたる御願に御座候得共閣下の御寄贈額御内報被下候は、無此上好都合ニ奉存候。尚原敬氏ハ金千円五ヶ年賦ニて寄付被致ノ由堤会長より内報有之候間御参考までニ申上置候。右御用まで。草々敬具

六月十一日 後藤新平

齋藤男爵閣下 侍曹

◇ 後藤が齋藤に、法人岩手県教育会会長堤定次郎からの寄付金要請を

伝えたものである。本書翰は以下の二点、すなわち、一、「齋藤男爵」

と記されており齋藤が海相を辞めた後であること、二、「原敬日記」(原

奎一郎編 第三巻、福村出版、一九六五年、大正三年五月二十五日条)に「岩

手育英資金に五百円寄附」との記述があることから大正三年のものとして推定される。

(18) 大正〔11〕年10月24日

〔封筒表〕齋藤総督閣下／添書〔封筒裏〕緘／後藤新平／芝君持参

御入京之由また拜趨も不致頗本意ニ背き候。多罪御寛恕可賜候。陳は芝染太郎君ジャパンプライムス之件ニ付屢内話有之候へとも所詮名案も無之候処朝鮮ニ関するプロパガンダも此機関ニよるの外なしと奉存候。右引受五万円にて出来可申候見込ニ御坐候。芝君斯道の経験家ニ有之杜撰の事ニ無之旁篤と閣下の御賢慮を煩し度添書仕候。草々不尽

十月廿四日 新平

齋藤総督閣下 侍曹

◇ 朝鮮において三・一独立運動が高揚していた大正一一年の書翰である。当時、日本の朝鮮統治が諸外国で非難されており、齋藤総督はプロパガンダによって朝鮮統治が成功していることを国際的に示す必要に迫られていた。文中に出てくる芝染太郎は当時、齋藤・後藤の人脈を背景に経営難に陥っていたジャパンプライムス社の改革を推進しており、かつ日米理解(当時最も日本の植民地統治に対して批判的であり、プロパガンダが必要であったのはアメリカ)にも尽力していたため、白羽の矢が立ったと考えられる。<sup>14)</sup>

(19) 大正13年2月12日

〔封筒表〕齋藤朝鮮総督殿〔封筒裏〕東洋協会々長子爵後藤新平

謹啓益御清穆奉賀上候。陳は今回御上京ヲ機トシ御高話拜聴旁粗餐差上度候間乍御迷惑来ル十五日正午丸之内日本工業倶楽部へ御来駕願上度此

段御案内申上候。敬具

大正十三年二月十二日 東洋協会々々長 子爵後藤新平

齋藤総督殿

◇ 書翰内に出てくる食事会について、『東京朝日新聞』朝刊（大正一三年二月一四日付）に「東洋協会 十五日正午丸之内日本工業俱樂部にて植民地高官招待午餐会を開く、会費五円」との記述が見られ、齋藤以外にも植民地官庁の高官が招待されていたことがわかる。

(20) 大正11年6月19日

〈封筒表〉 朝鮮／齋藤総督閣下／添書

〈封筒裏〉 後藤新平（※「東京市役所用」と印字）

過日御入京之事承り居拜話之機を得ず遺憾此事二候。陳は韓人柳泰慶兼て拜話の榮を得居り候趣の処本人は隠れ之日韓親善論者として努力致し居り屢々当局二疑はれし之処二妙味有之同人は在北京坂西中将の紹介にして面会後再応本人の心事も聞及候。閣下も既に御熟知之事かと拜察致候。今回帰省候趣御引見之上御高教二接し候事相叶候へは幸甚之至二奉存候。右まで添書候。草々不尽

六月十九日 新平

齋藤総督閣下 侍曹

◇ 文中に登場する柳泰慶<sup>15</sup>の件について、坂西が後藤に礼を述べている大正一一年七月二二日付後藤新平宛坂西利八郎書翰<sup>16</sup>、あるいは柳泰慶が齋藤と面会した記事<sup>17</sup>などから、大正一一年の書翰と推定できる。

(21) 大正一一年8月27日

〈封筒表〉 朝鮮／齋藤総督閣下／添書／御親展

〈封筒裏〉 緘／後藤新平／賀田金三郎君持参

其後益御清康奉敬賀候。陳は旧知賀田金三郎年来貴地に実業の開發を力め居候処最近御地不穩二付各実業家浮腰之者を生し候形勢より前日来談候故安心大に奮闘致候様申論渡航せしめ候。今後格別御眷顧二より啓運候様御指導奉伺上度添書仕候。御多忙中恐縮之至二候へとも御引見之上御懇示被成下度奉願上候。右用事まで。草々不尽

八月廿七日 新平

齋藤総督閣下 侍曹

◇ 賀田金三郎は大正一一年七月に他界しており、齋藤が朝鮮総督に就任していることから、大正八〜大正一〇年のものと推定される。

(22) 大正13年6月18日

〈封筒表〉 齋藤朝鮮総督閣下／必御親展〈封筒裏〉 緘／子爵後藤新平

此回御入京之趣早速拜参御左右可相伺之処例之懶怠紙上にて慶祝を表し候段御ゆるし可賜候。今朝遠藤源六君来訪貴府政務総監更迭有之哉二伝聞致し候とて菅原通敬君御採用相成候。推薦の談承り候へ共右は小生可申出順序方法無之候故卒直二同君より閣下へ内申候方可然とて相別れ候。尚小生よりも拙簡を以て願出置候事も約束仕候。自然御賢慮之上機會を得へき儀二御坐候へは願意御聞届被下度書外は異日拜芝二ゆつり早々用事まで。敬具

六月十八日 新平

齋藤総督閣下 下執事

追伸 令夫人閣下へもよろしく。

◇ 遠藤源六<sup>18</sup>が菅原通敬<sup>19</sup>を政務総監に推薦し、後藤がそれを斎藤に取り次いでいる内容である。大正一三年は護憲三派内閣の時期であり、この時期に植民地総督などの人事移動が予想されていたが、加藤高明首相は斎藤留任の意向であった。<sup>21</sup>そのため斎藤の総督留任に対して「紙上にて慶祝を表し」たと推定できる。

(23) 明治(一)年8月7日

〈封筒欠〉

拝読 益御清康奉賀候。目錄其他万事御手数奉謝候。台湾神社之分も工夫相附候ハ、別ニ寄附ニも不及相当代価下附候様可致と存居候。築港ニ関する御省御意見御送付可被下趣屈指御待致居候。

北投海軍用地売却海軍官舎建築之事類ニ彼是工夫中ニ御坐候得共六ヶ敷到底予算御提出相成候外有之間敷地所は相定め海軍建築地と致置候筈相決し居候。海軍大臣へも御序ニよろしく先は御答まで。草々不尽

八月七日 新平

斎藤賢台 侍史

◇ 後藤台湾民政長官・斎藤海軍次官の時代であり、台湾神社建設過程における寄付金の話があるため、明治三一年か三二年のものであると推定される。文中に出てくる「築港」とは後藤民政長官の「三大事業」である基隆築港計画のことである。この当時、築港計画は大蔵省・議会の反対により大幅に予算が削減されていた。本書翰以降、後藤(台湾総督府)と斎藤(海軍省)は予算獲得を目指して奔走し、明治三五年に議会提出、その後も継続して大蔵省・議会に対して交渉することとなる。

(24) 明治41年9月26日

〈封筒表〉 斎藤海相閣下／添書／親展

〈封筒裏〉 後藤新平／後藤勝造持参

先夜は御寵招を蒙り感謝之至ニ奉存候。然二年來小生懇親致居候神戸旅館の主人後藤勝造と申もの神戸元自由亭跡ニみかとホテルと申洋風旅館を起し営業致居候。此回海軍演習ニて老兄御入神相成可申付ては御投宿の栄を得度御紹介致し呉れ候様依頼ニまかせ添書致候。此主人は面白き人物ニ候。若主人は勤勉一方のものなり御都合ニて御投宿相叶候ハ、無此上候。菟も角も罷出候ハ、御都合ニて御引見被下度やと引

不鮮明のため解説不能  
九月廿六日 新平

斎藤海相閣下 侍曹

◇ 斎藤海相が神戸沖での海軍演習に際して神戸入りするにあたり、後藤がミカドホテルの主人である後藤勝造を紹介し、ミカドホテルへの宿泊と勝造との面会を願っているものである。『子爵斎藤実伝』四卷(財団法人斎藤子爵記念会編、一九四二年)および、『海軍制度沿革』一四卷(海軍大臣官房編、明治百年史叢書第一八九卷、原書房、一九七二年)の年表などによると、斎藤が海相時代に演習で神戸入りしたのは、明治四一年一月一八日の神戸沖での海軍特別大演習観艦式のみであることから、本書翰は明治四一年のものとして推測される。

(25) 明治(36)年11月5日

〈封筒欠〉

拝啓愈御清適慶賀此事ニ御坐候。陳は台湾ニ於て器械試製致候烏龍江茶之函拝呈仕度間何卒御風味被成下度候。草々拝具

十一月五日 後藤新平  
齋藤実殿

◇ 明治期、台湾において茶は特産の一つとして位置付けられており、明治三六年に台湾総督府は、桃園庁の竹北二堡草湍坡庄に機械製茶試験所を作り大規模な試験を開始した<sup>23</sup>。同年二月一六日付の「台湾総督府民政部殖産局茶樹栽培試験場試製各種茶品評依頼一件」<sup>24</sup>（後藤から珍田捨巳外務総務長官宛）で後藤は、試製した烏龍茶、緑茶、紅茶に対して確実な当業者による品評を行うよう珍田に要請していることから年代を推定した。

(26) 明治〔21〕年12月12日

〈封筒表〉 齋藤実様／御親展 〈封筒裏〉 Introduction／後藤新平

拝啓

過日は御来臨之処御疎末御寛恕可賜候。其後拝趨候へ共生憎御不在にて不得貴意遺憾ニ奉存候。然に郷人下飯坂武之進事過日横須賀賄之事にて御話致し候処右は随分よろしかるべくとの御話も有之候由なれとも同人金策出来兼候ゆへ此度は帰郷候外無之との趣にて只今罷越候。然るに横須賀の事ハ一向小生ニは不分明ニ候。何卒金三拾円許入用と申事ニ候処大兄の御明案にて右賄方ニありつき候様の御工夫相立申間敷候哉。右御願まで拙簡相添本人差遣よろしく御相談被成下度奉願上候。余は近日拝接ニ譲り候。頓首

十二月十二日 後藤新平

齋藤様 侍史

◇ 文中の「横須賀賄方」とは、おそらく横須賀の海軍関連施設におい

てのことと推測されるが、具体的な部署や立場などを特定するには至らなかった。下飯坂武之進は天保三年生まれで、明治一五年の段階では郷里・水沢におり、明治三二年の段階でも水沢に<sup>25</sup>いることが確認された。これを、本文中の「此度は帰郷候外無之」との文言、下飯坂の年齢が高齢であることを加味すると、これ以降に横須賀で働くとは考えにくい。その上で、齋藤の勤務状況、後藤の海外渡航・下獄などを勘案すると、明治二一年が最も蓋然性が高いと推定される。

(27) 12月25日

〈封筒表〉 齋藤海相閣下／下執事 〈封筒裏〉 後藤新平

昨鳥荒井泰治拝話兼て御依頼之事詳悉致したる事と奉拝察候。別紙は荒井ニ交付を遣はしたる分進送致候。近日漸病引籠居書を以て右用事御同度。草々不尽

十二月廿五日 新平

齋藤海相閣下 侍曹

◇ 荒井泰治は、明治三〇年後藤に推されて、サミュエル商会台北支店長として台湾赴任、以後明治四三年に、台湾商工銀行取締役を務めるなど台湾金融業界で活躍する、後藤に近い人物である。同封していたと思われる別紙の内容は不明であり、詳細な内容や年代特定は本書翰のみでは困難である。

註

① 高野静子『往復書簡後藤新平―徳富蘇峰 一八九五―一九二九』（藤原書店、二〇〇五年）八七―八九頁。

② 徳富猪一郎「草野門平君を悼む（一九一三年三月二九日）」『第一人物随

- 録」(民友社、一九二六年)一六二～一六八頁。
- ③ 『東京朝日新聞』明治三十三年一月二十九日付。
- ④ 実際、明治三十四年五月には、フランス系資本が融資を行うことになった旨が報道されている(同前、明治三十四年三月四日付)。
- ⑤ 『読売新聞』明治三〇年八月九日付。
- ⑥ 駄馬祐司『後藤新平をめぐる権力構造の研究』(南窓社、二〇〇七年)六一頁。
- ⑦ 「海軍予備員条例」『法令全書明治三十七年』二二七頁。明治四〇年六月二十九日付官報掲載。
- ⑧ 井尻常吉編『歴代頭官録』(朝陽会、一九二五年、七七八頁)をみても、海軍軍人が校長に就任している。
- ⑨ 『東京朝日新聞』明治四三年五月十三日付、「平山校長特旨叙勲」。
- ⑩ 明治四三年五月一六日付『官報』第八〇六七号、二九九頁。
- ⑪ 載洵は郡王銜貝勒の子であり、愛新覺羅氏。摂政王載灃の次の位である醇親王奕譞の第六子。
- ⑫ 『財部彪日記』(上巻、広瀬順昭・増田知子・渡辺恭夫・坂野潤治編、山川出版社、一九八三年)明治四三年一月二三日条には、「本夕水交社ニ於ケル大臣ノ貝勒招待会アリ出席ス。会スルモノ百三十名位、盛会ナリキ」との記述がある。
- ⑬ 民友社(非売品)、一九一三年。
- ⑭ ジャパンタイムズ編『The Japan Timesものがたり文久元年(1861)から現代まで』(ジャパンタイムズ、一九六六年)六五～六六頁。
- ⑮ 雑誌『亜細亜公論』(大正一一年五月～一二年一月まで刊行)の主筆であり、またその発行元である亜細亜公論社社長。彼の経歴については羅京洵『朝鮮知識人柳泰慶と『亜細亜公論』』(後藤乾一、紀旭峰、羅京洵編『亜細亜公論・大東公論』第一巻、龍溪書舎、二〇〇八年)三七～四五頁参照。
- ⑯ 山本四郎編『坂西利八郎書翰・報告集』(刀水書房、一九八九年)二三七頁。
- ⑰ 寿泉(柳泰慶)「斎藤朝鮮総督と語る」『亜細亜公論』一九二二年一月号、五二～五六頁(後藤乾一、紀旭峰、羅京洵編『亜細亜公論・大東公論』第二巻、龍溪書舎、二〇〇八年)。
- ⑱ 遠藤源六の経歴については、秦郁彦編『日本近現代人物履歴事典』(第二版、東京大学出版会、二〇一三年)一〇二頁。
- ⑲ 菅原通敬の経歴については、同前三七頁。
- ⑳ 『東京朝日新聞』大正一三年六月二三日付、「植民地主腦者大概は入替り／留任は兎玉閑東長官だけ／続々辞任申出の模様」。
- ㉑ 『東京朝日新聞』大正一三年六月二五日付、「辞意あるとも朝鮮総督は動かさぬ／斎藤総督の留任を懇望する／加藤首相の意嚮」。
- ㉒ 台湾総督府殖産局『台湾茶業概要』(明治四一年一月二二日)(アジア歴史資料センター A0603357800、国立公文書館所蔵)一頁。
- ㉓ 陳慈玉「日本統治期における台湾輸出産業の発展と変遷(上)」『立命館経済学』(第六〇巻、第五号、立命館大学経済学会、二〇一二年)六六四～六六七頁。
- ㉔ 「台湾総督府民政部殖産局茶樹栽培試験場試験製各種茶品評依頼一件」(アジア歴史資料センター Ref:B11091310800、B-3-5-2-128、外務省外交史料館所蔵)。
- ㉕ 水沢市史編纂委員会編『水沢市史』三近世(水沢市史刊行会、一九八二年)によると、戊辰戦争における白川口の戦いの際に水沢城に詰めており、その際三七歳であることが記載されているので、そこから逆算した。
- ㉖ 若原親懂『真宗明治妙好人伝』二編(布部常七、一八八四年)によると、明治一五年に水沢で土地を寄進し、真宗本願寺派の寺院を建立している。
- ㉗ 岩手県胆沢郡水沢町編『水沢町誌』(水沢町、一九四六年)によると、明治三二年に、次男・武次郎が設立した市立水沢英語学会の新校舎設立を監督したと記載されており、本文とあわせてこの時点では水沢に帰郷していたことが推測できる。
- ㉘ ㉙より、天保三年生まれならば、明治三二年時点で、満六七歳ということになる。